



医歯薬学研究部だより

徳島大学大学院 医歯薬学研究部

Tokushima University
Graduate School of Biomedical Sciences

Vol. 5

2017年4月1日

1 巻頭言(研究部長再任挨拶)
大学院医歯薬学研究部長 荻原 稔

2 副研究部長就任挨拶
医学教育部長 丹黒 章
口腔科学教育部長 河野 文昭
薬科学教育部長 佐野 茂樹
栄養生命科学教育部長 高橋 章
保健科学教育部長 雄西智恵美

4 徳島大学大学院医歯薬学研究部
アドバイザー・ボード報告
大学院医歯薬学研究部長 荻原 稔

6 旬の研究紹介
徳島大学発の学術系
クラウドファンディング実施進捗報告
創薬生命工学分野 教授 伊藤 孝司

7 旬の研究紹介
保健学系(看護技術学)
RN; PhD, FAAN, Professor of Nursing,
Graduate School of Biomedical Sciences
Rozzano C. Locsin

8 総合研究支援センターニュース
バイオイメージング研究部門 准教授 丸山 将浩

9 医療教育開発センターニュース

10 AWAサポートセンターニュース
徳島大学AWAサポートセンター長 葉久 真理

11 「蔵本地区国際交流のタベ」開催報告
医学部 国際コーディネーター 村澤 普恵

12 大学院医歯薬学研究部市民公開講座
開催報告
分子医化学分野 教授 野間 隆文
学会情報

13 新任教授ご挨拶
食品機能学分野 教授 河合 慶親
微生物病原学分野 教授 野間口 雅子
地域消化器・総合内科学分野 特任教授 佐藤 康史
組織再生制御学分野 教授 山本 朗仁
脊髄関節機能再建外科学分野 特任教授 長町 顕弘

退職教授等一覧

14 学会賞等受賞者紹介
編集後記



巻頭言

新しい研究部への移行と研究部長再任のご挨拶

大学院医歯薬学研究部長
荻原 稔

大学のガバナンス改革の一環として、2017年4月から教育、研究、教員の組織分離が行われ、蔵本地区と常三島地区にひとつずつ、人事と研究を所掌する教員組織が誕生することになりました。蔵本地区の研究部の名称は今までどおり「大学院医歯薬学研究部」で変更はありませんが、人事と研究を実質的に所掌する研究部に発展したわけです。

すでに蔵本地区では医学、歯学、薬学、栄養学、保健学の生命科学系3学部5大学院教育部を統合した研究部が設置されており、2004年から13年の歴史を刻んで来た経緯がありますが、今までの研究部は基本的にバーチャル組織であり、実質的な人事や研究推進の業務はそれぞれの3学部が担当していました。しかし、今回の改革により、研究部は教員人事を所掌し、さらには研究を推進する実質的な研究部組織になったと言えます。

2015年4月に「大学院医歯薬学研究部」に名称変更し、分野の部門配置も医科学部門(5系41分野)、口腔科学部門(3系26分野)、薬科学部門(4系20分野)、栄養科学部門(1系8分野)、保健科学部門(3系24分野)にまとめ、組織を一新したばかりでの変更ですが、今回の変更を良い機会と捉え、学部アイデンティティを生かしながらも、統合と融合が目に見えるパワーアップした研究部に育てたいと思います。

徳島大学は研究大学としての位置づけを明確にしていますので、名実ともに本研究部が中心的研究・教育組織になる必要があります。本研究部の発足以降、教育においては、積極的に研究者交流や共同研究を推進し、特に教育クラスターによる研究者の交流やリトリート、共同でのシンポジウム、市民公開講座の開催などを進めてきました。研究面では、研究部内の各分野の連携のみでなく、異領域連携、基礎研究部門と病院を中心とした応用研究部門の橋渡し研究による連携、そして外国を含めた学外の先端的研究施設との連携などを推進してきました。しかし、まだまだ統合と融合は道半ばであると考えます。昨年11月に開催した大学院医歯薬学研究部のアドバイザー・ボードの外部評価委員会でも、外部評価者からこれらの取り組みをさらに拡大し、真に意義のある研究部とするようにアドバイスをいただいたところです。このような厳しくもあり、かつ温かい学内外の評価と期待を踏まえて、生命科学研究の目的をしっかりと見据えて、プロフェッショナル集団として、有意義な成果を適正に世界に発信していく組織にしたいと思います。

最後になりましたが、2017年3月にこの新しい研究部の舵取りを担う研究部長の選考があり、私が再任されました。再任ではありますが、新しい研究部の第1番目の研究部長となりますので、改めて身が引き締まる思いです。2年の任期ですが、皆様方のご支援とご理解を得て、新しい医歯薬学研究部の組織作りを開始させていただきたいと思っています。引き続きよろしくお願いします。

副研究部長就任挨拶



副研究部長【医科学教育部長】

丹黒 章

平成29年4月から医歯薬学研究部副研究部長ならびに医科学教育部長を担当させていただきます。

平成16年の国立大学法人徳島大学へと改組直後、蔵本キャンパスにある大学院、医学、栄養学、歯学、

薬学研究科を統合、大学院ヘルスバイオサイエンス研究部（平成28年からは医歯薬学研究部に改称）が設立され、生命科学教育・研究を行う統合大学院としてスタートしました。

国立大学第3期中期計画による「徳島大学改革プラン」に沿った組織改革が進んでおり、徳島大学でも教育組織、研究組織、教員組織を分離することが決まり、平成29年度からは教員組織として、医学域、保健学域、歯学域、薬学域の4教員

会議を統合する医歯薬学研究部となります。

教育においては有効な人材活用を目指した組織横断的な、施設共用、共通講義の推進、多種連携教育が進むことになります。徳島大学蔵本キャンパスでは研究部発足以来12年間培ってきた連携をより密にして、苅原研究部長のリーダーシップのもと、より積極的な改革を推進していきたいと思います。研究分野でも、研究部横断的な、また、先端酵素学研究所や理工学部、生物資源産業学部との連携による研究クラスター形成により、先進的な研究を推進していきたいと思います。医学部医学科は平成30年に予定している国際認証受審の準備を進めています。また、JICAとともにモンゴル国立医科大学の附属病院建設に伴う人材育成への支援を開始する予定です。ご支援のほどよろしくお願い致します。



副研究部長【口腔科学教育部長】

河野 文昭

平成29年4月から前期2年に引き続き医歯薬学研究部副研究部長を担当させていただきますことになりました。

昨年度の教・研・教の組織改革で、今までの研究部と各部局の教授会の在り方が大きく変わりました。また、新たに4月から技術支援部が発足しました。さらに大学院

改革が進行中で、これからも組織改革が求められています。

4月からの研究部教授会は、代議員制で今までのように教授全員が集まることはなくなりますが、研究部所属の教員人事、研究部に配分される予算など重要な案件が審議されるようになります。各部局に配分される予算が大幅に削減されることから、今までの研究部の事業が進められなくなる懸念されま

す。特に教育関係では、蔵本キャンパス全体の多職種協働、プロフェッショナリズム教育やリトリートなどが挙げられます。時代の要望もあり、今まで行ってきた実績ある教育プロジェクトですので、是非とも継続、発展させる必要があります。

昨年度は、徳島大学として第2期中期目標・中期計画期間の自己評価と新たな目標の策定の年になり、「世界ランキング100位以内の大学をめざす」との方針が大学改革プランで示され、これに邁進することが決まりました。徳島大学の現状、蔵本キャンパスの各部局の置かれている状況を理解し、研究部の教員が一致団結し対応することが必要と考えます。

徳島大学が更に発展するよう医歯薬学研究部長を補佐して、一生懸命頑張る所存ですので、ご指導、ご鞭撻よろしくお願い致します。



副研究部長【薬科学教育部長】

佐野 茂樹

平成29年4月1日より、医歯薬学研究部副研究部長ならびに薬科学教育部長を担当させていただきますこととなりました。新たな体制でスタートする新生医歯薬学研究部のさらなる発展のため、微力ながら粉骨碎

身努力いたす所存です。

昨年4月より第3期中期目標・中期計画期間が始まり、徳島大学においては大学院組織の再編が全学的に進められ、医歯薬学研究部の果たすべき役割はますます大きく、重要になってまいりました。薬学部では、6年制学科（薬学科）と4年制学科（創製薬科学科）を併設した新しい教育制度が平成18年に始動してから11年が経過しましたが、今年度に実施されます

入学者選抜より、これまでの両科一括募集から学科別募集へと大きく舵を切ります。それにとまない薬科学教育部におきましても、創製薬科学専攻ならびに薬学専攻の各専攻ごとに特色のあるカリキュラムを再構築し、教育研究活動の活性化に向けた取り組みを強力に推進することにより、広い視野と国際性を備えた創薬・製薬研究者ならびに高度な職能を有する指導的薬剤師、医療薬学研究者等の養成に努めなければなりません。蔵本地区の各教育部の先生方との広範かつ密接な連携のもと、「くすり」を基盤とした教育研究をより一層高度化し、多様な薬学関連領域にあって次世代を担う人材の育成を目指します。

皆様には今後ともなお一層のご支援、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

**副研究部長【栄養生命科学教育部長】****高橋 章**

平成 29 年 4 月より医歯薬学研究部副研究部長・栄養生命科学教育部長を担当させていただきます。栄養学科は、平成 26 年度より医科栄養学科に改組し、新しい教育カリキュラムを準備し充実した臨床教育

実習体制を構築しています。次は、大学院改革を検討しています。なかでも、栄養学分野における臨床的研究と基礎的研究の融合を促進するための体制整備を行いたいと考えています。これまでは“日本で唯一の栄養学教育研究体制を持つ栄養学科”とうたってきましたが、これからは“世界で唯一の”または“アジアで唯一の”と言えるような体制を目指したいと思っています。

現在、栄養生命科学教育部には、前期（修士）課程および

後期（博士）課程とも定員を超える学生が入学しています。栄養生命科学教育部にとって大学院生、若手研究者は宝であり、大学院生や若手研究者の育成に一番の存在意義があると思っています。現在の日本の大学は厳しい競争原理、経費削減の圧力にさらされていますが、大学院生や若手研究者が活躍できる環境を提供できるように努めたいと考えています。

医歯薬学研究部のこれからの発展につながるように一所懸命頑張る所存ですので、ご指導・ご助言の程よろしくお願い申し上げます。

**副研究部長【保健科学教育部長】****雄西智恵美**

このたび、平成29・30年度の副研究部長（保健科学教育部長）を担当させていただくことになりました。急激な社会の変化のなか、大学を取り巻く環境が大きく変化し、教育改革が求められています。また、このよ

うな時代を見据えた組織運営の改革も大きな課題となっていますが、苛原研究部長のもと医歯薬学研究部の発展に力を尽くしていきたいと思います。

保健科学教育部は、平成 18 年に修士課程が設置されて以来、多くの研究成果を発表すると共に、教育・研究者として、また医療のエキスパートとして社会に貢献できる人材を世に送り出してきました。医療の高度化、複雑化が加速するなかチーム医療がますます重要となっている昨今、保健科学教育部の独自性を、

研究を通して発信していくと共に、他の学問分野と連携、共同したグローバルな視点をもった研究の推進が求められています。徳島大学蔵本キャンパスは、医療系 3 学部 5 教育部と大学病院を有する多職種にわたる医療人と教育・研究者を育成する恵まれた教育環境であり、この充実した教育・研究資源をフルに活用して更なる保健科学教育部の発展をめざします。

保健科学教育部には、生涯健康支援学領域（前期課程：看護学領域）、医用情報科学領域および医用検査学領域の 3 領域があり、研究に対するモチベーションの高い助産師や養護教諭、倫理観やクリティカルシンキング力の高い専門看護師や放射線治療専門診療放射線技師、医学物理士等の高度専門職業人の育成も強化し推進していきたいと考えています。

皆様のご支援、ご指導いただきますようよろしくお願いいたします。

徳島大学大学院医歯薬学研究部アドバイザー・ボード報告

■ 大学院医歯薬学研究部長 苛原 稔

I. 外部評価委員会の開催

2016(平成 28)年 11 月 25 日(金曜日)に、第 3 回徳島大学大学院医歯薬学研究部アドバイザー・ボードによる外部評価委員会が、徳島大学蔵本キャンパス医学部第一会議室で開催された。今回は、2012 年 4 月から 4 年間の研究部の活動に関して、外部委員のご意見を拝聴することになった。

アドバイザー・ボードの委員は、医学系から松澤佑次(一般財団法人住友病院院長)と武谷雄二(アルテミスウイメンズホスピタル理事長/元東京大学医学部附属病院院長)、歯学系から平田雅人(九州大学大学院歯学研究院院長)と村上伸也(大阪大学大学院歯学研究科教授)、薬学系から桐野豊(徳島文理大学長)と近藤裕郷(国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所創薬デザイン研究センター長)、栄養系から田中啓二(公益財団法人東京都医学総合研究所理事長)、保健系から秋元典子(岡山大学大学院保健学研究科教授)の各先生方であり、当日は 7 名の委員のご出席をいただいた。

大学側からは、永田俊彦(徳島大学理事・研究担当)、苛原 稔(研究部長・医科学教育部長)、河野文昭(副研究部長・口腔科学教育部長)、大高 章(副研究部長・薬科学

教育部長)、二川 健(副研究部長・栄養生命科学教育部長)、近藤和也(副研究部長・保健科学教育部長)、赤池雅史(医療教育開発センター長)、佐々木卓也(医学部長補佐・研究担当)が参加した。進行は秋山靖夫(蔵本事務部長)が担当した。

まず、永田理事および苛原研究部長から、開会の挨拶を兼ねて、本委員会開催の意義と重要性を説明した後、外部委員 7 名と大学側 8 名の自己紹介を行った。

次に、医歯薬学研究部の全体および各系の 4 年間の活動報告を行った。各パートでは、配付資料ならびにパワーポイントを用いて大学側のそれぞれの担当者から説明した後、各パート毎に質疑応答を行った。

全体討論において、7 名の外部委員から医歯薬学研究部全体および各系について、総合質問を受け質疑応答を行った後、7 名の委員からそれぞれ、全体的な講評を拝聴した。

最後に閉会の挨拶を兼ねて、苛原研究部長から、本日の委員会で外部委員から賜ったご指摘やご意見を今後の研究部運営に生かすことが表明され、委員会は終了した。

なお、詳細は 2012 ～ 2015 の活動をまとめた活動実績報告書を参照していただきたい。



II. 各委員からの代表的な評価(詳細は活動実績報告書を参照していただきたい。)

- 医療系3学部、5教育部を一キャンパスに擁している徳島大学の強みを生かしたボーダレスな組織運営を研究部の目的として、成果は着実に進んでいる一方、教育組織と整合性を取った半面、各学部のボーダレスな教育・研究を展開するという主旨からは若干後退したような印象を受ける。医療教育開発センターをハブにして教育部、各学部、病院さらには全学とも連携した教育システムは先進的で、医歯薬学部を志望する各学部および大学院の学生教育に威力を発揮するものと思われる。
- 研究部が目指す多様性には、各部門が独自性・自立性を発揮できることを保障することが重要である。全体で一定の方向を目指す多様性が損なわれる懸念もあるので、「角を矯めて牛を殺す」ことがないように各部門間の調和と独自性の巧妙なバランスをとることが重要であろう。
- 医・歯・薬学の各教授会に加えて医歯薬学研究部教授会(実際には代議員会)があり、各教授会の独自性を保ちつつ上手く機能しているように見受けられるが、研究部的に、「選択と集中」を原則とした予算措置を考えてほしい。また、もう少し研究費の獲得が伸びてもいい様に思われる。民間の研究助成財団への申請を積極的に促したり、seniorな研究者がjuniorの書いた申請書をブラッシュアップする体制を部局として整えたりするなどの工夫が必要である。
- 個々の研究部の境界にあたる様々な課題やテーマを探索・議論・解決する組織が常設されれば、統合大学院としての特性やメリットが一層発展していくのではないかと思われる。研究部全体の活動に対して、協調的かつ適切にPDCAサイクルを回していくことに責任を持つ体制を今後検討するべきである。
- 組織的大学院教育のユニットとして、医療系クラスターを設定し、国際的な連携や、地域の医療系機関との連携を活用する企ては大変結構なことと思われる。
- 今後改善すべき点として、大学中期目標の中に世界的水準の研究の適切な評価で正当な評価に繋げていく工夫を考えるべきである。クラスター体制によってどのような波及効果が生まれてくるのかを明確にした上で貴大学の特徴の一つとして、できれば他大学への展開に繋がれば大きな成果になる。
- 「糖尿病臨床・研究開発センター」が、平成28年度に既存の「疾患酵素学研究センター」・「疾患プロテオゲノム研究センター」・「藤井節郎記念医科学センター」と統合して先端酵素学研究所として発足し、ゲノムからタンパク質の基礎研究が包括的に推進できる体制に再編したので、今後、研究部と連携して徳島大学の科学力が一層充実するための起爆剤になることを期待したい。
- 国からの運営費交付金の削減から、特に地方大学は疲弊の一途を辿っているが、研究部は活発な研究活動をすることで、地域医療の水準向上のために大きく貢献してきた。今後も引き続いて意欲的に研究活動を推進していくことができれば、この懸念は払拭されるであろう。研究活動成果の評価は、主に論文発表(質と量)と外部研究資金の獲得に集約される。論文発表の総数ではよく健闘しているが、残念ながらIFが5以下の論文が大半であることは、上質の論文が多くないことを示唆しており、今後、改善に向けての取り組みが必要であるかもしれない。
- 今後の徳島大学の発展には国際化が必須であり、研究部での国際交流は非常に活発であると高く評価できる。



旬の 研究紹介

徳島大学発の学術系クラウドファンディング実施進捗報告 — 遺伝子組換えカイコを用いるリソソーム病の治療薬開発を目指して —

■ 創薬生命工学分野 教授 伊藤 孝司

徳島大学は、大学改革の一環として、インターネット(SNS)を利用して一般の市民に向けて大学事業の目的や意義を分かりやすく紹介し、事業の実施に必要な資金を獲得するために、広く支援者から研究資金を募るクラウドファンディング(CF)を推進している。私達、大学院医歯薬学研究部(薬学域)・創薬生命工学分野研究室は、本学、野地澄晴学長とURA 部門からの誘いを受け、学術系 CF サイト「academist」社を介して、遺伝子組換えカイコを利用し低コストで生産する組換えヒトリソソーム酵素をリソソーム病の新規治療薬として臨床応用することを最終目標とし、資金募集期間(2016 年 8 月 22 日～10 月 25 日)・目標金額(100 万円)で CF に挑戦した。なお、本 CF システムでは、期間内に目標金額の募金を獲得できれば成功、未達なら研究費は一切入手できない。幸いにして、昨年 10 月 5 日に募金金額 100 万円以上に到達し、成功に至った。学内からもご支援いただき感謝申し上げます。

リソソーム病(ライソゾーム病)は、細胞内外の生体分子の分解代謝に関わるリソソーム酵素の遺伝的欠損に基づき、患者臓器内での基質の過剰蓄積と様々な症状を引き起こす先天性代謝異常症である。疾患としては 40 種類ほど存在し、発生頻度は 1～10 万人に一人程度の希少疾患で、厚労省では特定疾患「難病」に指定されている。近年、哺乳類培養細胞で製造する組換えヒトリソソーム酵素製剤を 1～2 週間に 1 回の患者内静脈内投与する酵素補充療法が開発され、国内では 8 種類の疾患に対し 9 種類の治療薬が臨床応用されている。しかし患者 1 人の治療に年間 3,000 万円以上の高額な医療費がかかる。またリソソーム病の半数以上は中枢神経症状を呈するが、静脈内投与では酵素は脳実質内まで到達しにくいと、中枢神経症状には治療効果は見込めない。この解決に向けて脳脊髄液中に酵素を投与する補充療法が開発され、現在複数の臨床試験が世界で実施されている。

これらの現状を踏まえ私達は、大量の絹糸を吐き出して繭を作るカイコの優れたタンパク質生成能力に着目した。目的のヒトリソソーム酵素遺伝子を高発現する組換えカイコを利用すれば、哺乳類細胞株で治療用ヒト酵素を製造する現行法に比べ、より低コストで安全にリソソーム治療薬を製造・供給できる可能性がある。これまで私達は、農水省プロジェクト(2010～14 年度)などにおいて、二種のリソソーム病

を研究対象としてきた。一つは視力障害や中枢神経症状などを発症する日本人種に多いカテプシン A 欠損症で、現在根本治療薬はない。もう一つはイズロニダーゼ欠損のムコ多糖症 1 型で、哺乳類細胞由来製剤はあるが中枢神経症状には無効である。私達は各々責任酵素遺伝子を高発現する組換えカイコを農研機構との共同で作製に成功し、その絹糸腺から機能を保持したヒト酵素の簡便な抽出・精製法を確立するとともに、疾患モデルに対する有効性を示してきた。しかしカイコを解剖し、目的酵素を含む絹糸腺を取り出して精製する方法は、手間がかかる上、組織由来の夾雑物が多くなる。本クラウドファンディングで得た研究費は、組換えカイコの繭から目的酵素などを精製し、その酵素を欠損するモデルマウスに投与して治療効果を調べるために使用し、その成果を本年 3 月末に開催される日本薬学会年会で発表する予定である。今回、SNS を通じて「日本ムコ多糖症患者家族の会」や国内製薬企業の方々との接点が広がり、資金面でのサポートも得られたことから、今後は、リソソーム病治療薬としての実用化を目指し、公的研究費の確保や製薬会社・バイオベンチャーとの共同研究に繋げていきたいと考えている。



学術系クラウドファンディング挑戦に成功しました

[academistとは?](#)
[プロジェクトを知る](#)
[ログイン](#)
[新規登録](#)

私たちの掲げる“新蚕業革命”
是非一緒に成功させていきましょう

<https://academist-cf.com/projects/?id=31>

組換えカイコで「リソソーム病」の治療薬を作りたい!

実績総額 1,219,540円

達成率 121%

スポンサー 71人

残り期間 終了

[このプロジェクトの詳細を見る](#)

「カテプシンA欠損症モデルマウス」に対する

私たちは、カイコに注目しました。

研究代表 伊藤 孝司

共同研究員 伊藤 孝司

共同研究員 伊藤 孝司

共同研究員 伊藤 孝司

旬の
研究紹介

Relationship between Caring in Nursing Practice and Humanoid Nurse Robot Technologies

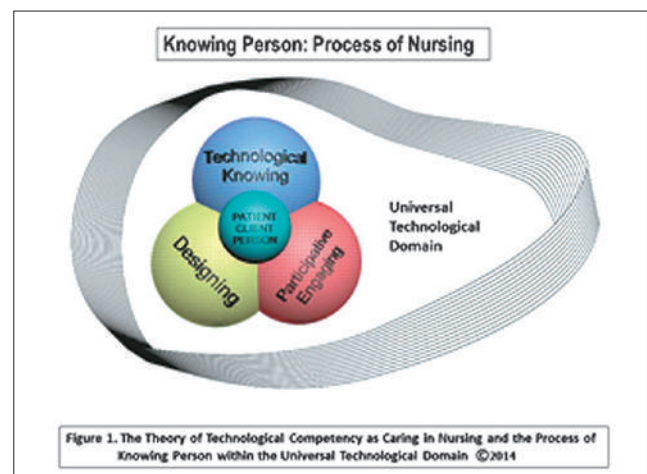
■ Rozzano C. Locsin, RN; PhD, FAAN, Professor of Nursing, Graduate School of Biomedical Sciences

Nursing practice is recognized today as performing activities of ‘doing for’ and ‘being with’ persons. Developing processes of nursing based on specific nursing theories is increasingly becoming essential. The theory of *Technological Competency as Caring in Nursing (TCCN)* (Locsin, 2005, 2016) provides person-focused nursing care processes centered on *technological knowing*, *mutual designing*, and *participative engaging* constituting what nurses use in their practice. These clinical practice processes of engagement are important to futurist nursing, and essential to human health care.

With the exponential development of technologies in human healthcare, the imminent integration of robotic technologies and artificial super intelligence (ASI) (Barrat, 2013) will feature seamless interactions between human beings and humanoid robots. The practice of nursing as ‘knowing persons as caring’ becomes critical for recognizing the ontology of nursing. ASI-equipped humanoid nurse robots (HNRs) and human persons will have shared life experiences. While Boykin and Schoenhofer (2001) described nursing as the shared lived experiences between nurses and persons, when nursing practice remains instinctively “doing for and being with persons,” nurses may be replaced by HNRs which are equipped with more sophisticated and highly programmed precise functions effectively and competently performing nursing care tasks (Locsin, 2005). Nursing is more than these activities. Nursing is a transactional engagement in nursing between human persons and highly intelligent machines. In the future, nursing care will require an adaptive practice process. Tanioka’s (2017) *Transactive Relationship Theory of Nursing (TRETON)* and descriptions offered in the *Nursing Robot* book (Tanioka, et al, 2017) will relate patients, human nurses, healthcare providers, and HNRs. Future definitions of persons will change as with their composition. As post-humans or cybernetic organisms using mechanical organs capable of surviving, living, and being persons in a technologically demanding future world, the characteristic humanness of persons will also change.

The future of nursing research is the utilization of theories of nursing to explain and describe phenomena of

nursing. Locsin’s *TCCN* theory is continually advancing to adapt and adopt idealistic conceptualizations serving intelligent machine technologies and the post-human future of persons within the Universal Technological Domain (Fig.1).



References

- Barrat J. (2013) *Our Final Invention*. Thomas Dunne Books, St. Martin's Griffin Press, New York.
- Boykin, A., & Schoenhofer, S. (2001). *Nursing as Caring: A Model for Transforming Practice*. Jones and Bartlett, Sudbury, CT.
- Locsin, R. (2005). *Technological Competency as Caring in Nursing*. Sigma Theta Tau International Press, Indianapolis, Indiana.
- Locsin R. (2016) Technological Competency as Caring in Nursing: Co-creating Moments in Nursing Occurring Within the Universal Technological Domain. *The Journal of Theory Construction and Testing*, 20(1), 5-11.
- Tanioka, T. (2017). The Development of the Transactive Relationship Theory of Nursing (TRETON): A Nursing Engagement Model for Persons and Humanoid Nursing Robots. *Int J Nurs Clin Pract* 4: 223. doi: <https://doi.org/10.15344/2394-4978/2017/223>
- Tanioka, T., Yasuhara, Y., Osaka, K., Ito, H., & Locsin, R. (2017). *Nursing Robots: Robotic Technology and Human Caring for the Elderly*. Fukuro Shuppan, Okayama, Japan

Center News ①

総合研究支援センターニュース

■ バイオイメージング研究部門

准教授 丸山 将浩

総合研究支援センター内にあるバイオイメージング研究部門では、ニコン光イメージングプラットフォームと in vivo イメージングプラットフォームからなるイメージング機器類を取り揃えており、多くの皆様にご活用いただいております。本学では動物資源研究部門様のおかげによって動物実験を行うに適した環境が整備されています。今回は動物イメージング実験の際に使用することが出来るポジトロン断層/CT装置 (positron emission tomography/CT : PET/CT) と核磁気共鳴装置 (magnetic resonance imaging : MRI) についてご紹介したいと思います。

動物を使った生体イメージングは、解剖など生体に大きな侵襲を加えることなく体内の状況を把握することを可能にする実験観察アプローチです。病態を解明する作業を行う上では、動物を撮像したあと解剖し病理学的解析を組み合わせることで詳細なデータを得ることが可能になります。また動物の病変部位を生体レベルにて経時的に観察することによって、病変の進行状態や治療を施した際における効能の評価に応用できます。更には皆様のご専門とされる

独自のアプローチによって得られた研究結果を検証する手段としてこれらイメージングツールをお使いいただくことで、幅のある成果に繋がれることも可能となり得ます。

1) Siemens 社 Inveon PET/CT : ラジオアイソトープ (RI) を生体内に投与して、病変部位における RI 集積動態を観察できます。18F-FDG を使用した PET では、臓器レベルでのブドウ糖消費状況を機能的に評価できます。脳神経機能や腫瘍、炎症等の状態を観察することに応用されています。

2) Bruker 社 Biospec 70/20 USR MRI : 7 テスラの超高磁場 MRI であり、鮮明な臓器形態画像を取得することができます。また造影剤を使用することなく血管撮影が可能です。

これら機器を駆使することによって基礎から前臨床までのイメージング研究をカバーすることが可能となり、ヒト臨床研究に繋げるステップを踏むことができます。例えばある疾患に対する治療薬を開発した際には、モデル動物実験で効能を確認した上で、ヒト臨床応用に繋がります。この動物実験における効能評価系としてイメージングアプローチが役立ちます。本学では病院にサイクロトロンを設置しており、臨床 PET 検査が行われております。このような恵まれた環境で前臨床動物 PET 研究を行える施設は全国でも数少ないことが知られています。この特色ある研究環境を生かすべく、是非とも多数の皆様からのイメージング機器利用に関するご相談・お申込をお待ち申し上げます。



Siemens社 Inveon PET/CT



Bruker社 Biospec 70/20 USR MRI

Center News ②

医療教育開発センターニュース

取組紹介

●組織横断型教育クラスターによる大学院教育支援

平成21年度より教育クラスターによる大学教育支援が継続されており、「心・血管」「肥満・糖尿病」「感染・免疫」「骨とCa」「脳科学」「発生・再生・遺伝」の6つのクラスター活動を支援しています。

■クラスターコアセミナー：

6クラスター合わせて50回開催されました。
(詳細：医療教育開発センターHP <http://www.hbs-edu.jp/index.html>)

■ミニリトリート：

クラスター毎に企画、実施されています。今年度はすべてのクラスターが学内開催となりました。



クラスター	日時	ミニリトリート参加人数(人)				
		院生	学部生	教員	講師	計
心・血管	H28.10.23	18	3	19	1	41
感 染・ 免 疫	H28.10.26	38	25	42	1	106
肥 満・ 糖 尿 病	H29.2.3	7	1	28	1	37
骨 と C a	H29.2.18	5	0	12	1	18
脳 科 学	H29.3.4	11	11	17	2	41
発生・再生・遺伝	H29.3.15	5	0	10	0	15
合 計		84	40	128	6	258



●CV個別講習会

平成28年度は23回開催され、のべ88名の医師、研修医が受講しています。新しく、血管アクセス用超音波診断装置サイトライト5、抹消挿入中心静脈カテーテル PICCシミュレーターが購入され、さらに充実した研修が実施されています。



●シミュレーター活用のご案内

《レザシアン with QCPR》

その場で手軽に実施者のスキルを評価できます。リアルタイムフィードバックとディブリーフィングで質の高いトレーニングを効果的に実施することができます。



《うらしま太郎：高齢者体験》

高齢者(75-80歳)になった時の身体的機能低下や心理的变化を体験しながら、高齢化社会で求められる医療について学べます。実施方法のノウハウも準備しました。



●第10回チーム医療入門～蔵本地区1年生合同WS～ 「医療安全の質と向上に向けて今、私達にできること」

医療人を目指す学生が相互理解を深め、将来ともに円滑なチーム医療を行える基盤形成を目的として、蔵本地区の1年生全員を対象として毎年行なわれています。

前年度に引き続き、このWSはSIH道場～アクティブラーニング入門の取組として位置づけられました。

日時：平成28年9月30日(金) 13:00-17:00

場所：蔵本キャンパス大塚講堂大ホール 他

演題：「チーム医療への人間工学からの提言」

講師：小松原明哲先生

(早稲田大学 理工学術院教授)

参加人数：433名(全1年生の98%)



●第4回学部連携PBLチュートリアルトライアル(学生・教員FD)

1年生合同WS続くチーム医療学習として、有志学生参加によるPBL学習が行われました。

日時：1日目～平成28年11月4日(金)

18:00-19:30

2日目～平成28年11月9日(水)

18:00-19:30

場所：スキルス・ラボ5&6

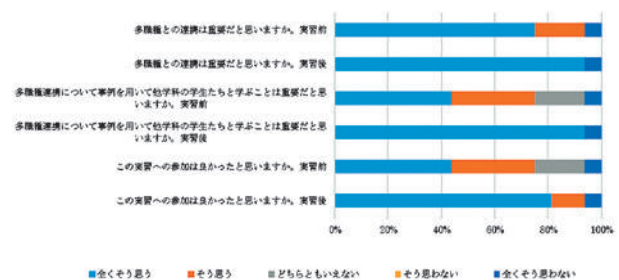
テーマ：老々介護の支援

参加人数：

《1日目》教員8名、学生15名(医学科5名：1・4・5年、医科栄養学科3名：3年、歯学科3名：4年、口腔保健学2名：3年、薬学部2名：4年)

《2日目》教員9名、学生16名(医学科2名：4・5年、医科栄養学科4名：3年、歯学科4名：3・4年、口腔保健学2名：3年、薬学部4名：4・5年)

〈参加学生アンケート結果〉



●第2回チーム医療臨床実習

1年生講堂WS、2年時以降の学生による学部連携PBLチュートリアルに続く学習として位置づけられています。

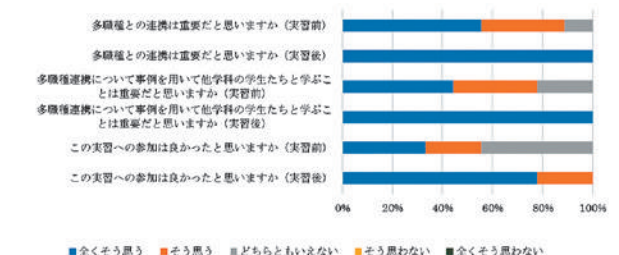
日時：平成28年10月20日(木) 16:00～17:00

場所：西病棟6階 呼吸器・膠原病内科 多目的室

参加者：医学部医学科5年6名、薬学部5年3名、教員4名

ファシリテータ：吾妻雅彦(医療教育開発センター)

〈参加学生アンケート結果〉



●第5回模擬患者参加型教育検討会

日時：平成29年3月14日(火) 17:00～

場所：日亜メディカルホール

参加人数：模擬患者17名、教職員26名、学生1名



Center News ③

AWAサポートセンターニュース

AWA サポートセンターの 新たな取り組みに向けて

■ 徳島大学AWAサポートセンター長

葉久 真理

2016年があったという間に過ぎ、2017年の新しい年が始まりました。

このセンターニュースが発行される頃には桜の花が咲き、新年度がスタートしていることでしょう。

AWA サポートセンターでは、「四国5大学連携による女性研究者活躍推進コンソーシアム形成事業（H26～H28）」の最終評価に入っています。また、徳島県の女性医療従事者支援事業もこの3月で終了となります。四国5大学連携事業の目標である(1)女性研究者の研究力向上、(2)女性研究者の管理職への登用、(3)女性研究者の在職比率、採用比率の増加と離職者数の減少、上位職登用率の向上は達成できたのか。女性研究者のニーズと支援は合致していたのか。これらを評価・検証し、今後の事業に反映していく方針です。その中で、本事業における大きな成果は、女性研究者のネットワークが広がり、多くのロールモデルの方々との出会えたことです。この成果はやがて大きな花を咲かせることと思われま

す。一方、『社会のあらゆる分野において、2020年までに、指導的地位に女性が占める割合が少なくとも30%程度になるように期待する』という目標は、残念ながら進んでいないのが現状にあります。指導的地位のみならず、女性が働き続けるためのワーク・ライフ・バランス支援は、まだまだ十分な方策と予算が確保されていません。また男性においては、「育児をしない男を、父とは呼ばない」(1999年、厚生労働省)と言われ、『社会全体で、男性がもっと積極的に育児に関わることができる一大ムーブメントを巻き起こす』イクメンプロジェクトが発足し、「イクメン」は世の中に広く浸透しました。21世紀の国民運動計画である健やか親子21では、「育児に参加する父親の割合を増加傾向へ」という目標を掲げて取り組んできた結果、父親の育児参加は増加傾向となりましたが、同時に、今後10年の間に育児疲れや育児不安に陥る父親が増えてくる可能性があることも示唆されています。女性だけでなく男性のワーク・ライフ・バランスにも目

を向ける必要があります。そして何よりも必要なのは、女性も男性もそれぞれに、社会・職場・家族の調和を図りながら、自らの力で現状を打開する力を持つことです。

今後は、若手研究者が将来のキャリアパスを見通し自立して研究を推進する力や、女性(男性)研究者が研究と出産・育児介護等との両立を図っていく力を獲得するための環境整備と、本学の構成員皆が能力と個性を尊重し合い活躍することができるよう支援を展開していきたいと考えております。

引き続きご協力を賜りますようお願いいたします。



■ 主な事業報告

平成 28 年 11 月 18 日 (金)

四国 5 大学連携女性研究者活躍推進シンポジウム 2016

参加者 218 名

会場: 藤井節郎記念ホール

(徳島大学蔵本キャンパス

藤井節郎記念医科学センター 1F)

「地域貢献! 世界トップレベルの

女性研究者誕生を目指して」

特別講演: 東京大学大学院農学生命科学研究科

特任教授 中西友子氏

パネルディスカッション ポスターセッション

平成 29 年 1 月 28 日 (土)

ライフプランニング講座「知っておきたい“からだのこと”」

平成 29 年 1 月 30 日 (月)

第 7 回研究力伸張セミナー「英語力アップ集中講座」

平成 29 年 2 月 3 日 (金) ～ 4 日 (土)

第 3 回四国 5 大学連携女性研究者研究交流発表会

平成 29 年 3 月 8 日 (水)

第 8 回研究力伸張セミナー「英語力アップ集中講座 Part II」

平成 29 年 3 月 9 日 (木)

第 2 回研究倫理啓発セミナー

「研究者の立場で研究不正を考える」

平成28年度「蔵本地区 国際交流の夕べ」を開催しました

■ 医学部 国際コーディネーター 村澤 普恵

昨年11月29日（火）、キッチン SAKU-LA（蔵本キャンパス 蔵本会館1階）で、平成28年度「蔵本地区国際交流の夕べ」（以下「交流会」（医歯薬学研究部主催））を開催しました。この交流会は、母国を遠く離れて徳島に暮らす蔵本キャンパスの留学生が、相互にまた日本人学生や教員とも交流を深め、研究の成果ばかりではなく、徳島での楽しい思い出を母国に持ち帰ってもらうことを目的として、平成17年から毎年年末近くに開催しています。13回目の開催となる今回は、蔵本キャンパスに学ぶ10か国の留学生とその家族、教員、日本人学生あわせて100名が参加しました。最近では、海外や英語に興味のある日本人学生の参加も増え、中でも英語によるコミュニケーションの実地学修をすることを目的として活動している ENGLISH+（医学部教育支援センターがサポート）の皆さんの参加も増え、留学生と英語による交流を楽しんでいます。

交流会は、勢井宏義医学部長補佐（統合生理学分野教授）の開会のご挨拶で始まり、参加者は SAKU-LA 心づくしの食事と、苅原稔医歯薬学研究部長／医学部長から差し入れされた飲み物などをいただきながら歓談しました。

宴もたけなわとなった頃、参加者によるプレゼンテーションやパフォーマンスが行われました。まずは、ベトナム人留学生の Pham Tran Phuong さん（循環器内科学分野）が、スライドを使って日本語でベトナムの見所、食文化などを紹介した後、同じくベトナム人留学生の Nguyen Quoc Anh さん（予防環境栄養学分野）が、徳島で経験し感じたことを発表しました。そして毎年のように着物文化について紹介してくれる大学病院栄養部の長尾紀子さんは、今回も流暢

な英語で着物についてプレゼンテーションし、留学生の Gulinu Maimaituxun さん（循環器内科学分野）に着物を着付けてくれました。長年着物にあこがれていたという Gulinu さんは、「現在離れて暮らしている夫に写真を送ります。」と言って満面の笑みを浮かべていました。日本人学生の藪野淳也さん（医学科4年）は、「TEDxTokushimaU」（TED: Technology Entertainment Design。ニューヨークに本部を置く非営利団体。様々な分野の第一人者による世界的規模の講演を行っている。その TED の精神に沿って徳島で様々な人々と交流を図ることを目的としている。）の活動について紹介しました。その後、日本人大学院生の板東正浩さん（代謝栄養学分野）が見事な三味線演奏を披露、同じく大学院生の酒井晶子さん（臨床食管理学分野）をリーダーとするアンサンブルの素敵な演奏が交流会に花を添えました。板東さんの三味線によるぞめきのリズムに、思わず阿波踊りを踊る参加者もいて、交流会は国籍を超えて大いに盛り上がりました。

徳島大学には27カ国226人の留学生が在籍、内12カ国49人が蔵本キャンパスで勉学に励んでいます（平成29年1月1日現在）。また、徳島大学は、25カ国74の大学と学術交流協定を締結し、学生交流や共同研究を行っています（平成29年1月1日現在）。海外との交流、グローバル化が進む中で、「国際交流の夕べ」は、まさに蔵本キャンパスのグローバル・コミュニティです。蔵本に居ながらにして多くの異文化に触れ、グローバルな意識を醸成することが期待できます。参加してくださった皆さん、発表してくださった皆さん、交流会を盛り上げてくださってありがとうございました。また年末にお会いしましょう！！



開会のご挨拶をする
勢井先生

食事を楽しみながら交流する
留学生

初めての着物に感
激する留学生(右)

ベトナム人留学生によるお国
紹介

日本人学生による三味線とアンサンブル
演奏



参加者による記念撮影

大学院医歯薬学研究部市民公開講座 開催報告

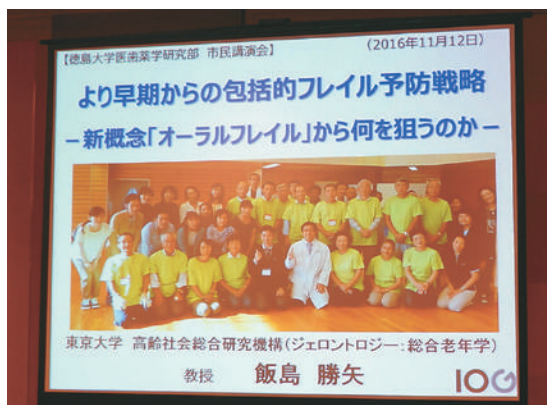
■ 分子医化学分野教授 野間 隆文

平成28年11月12日（土）ホテルクレメント徳島において徳島大学大学院医歯薬学研究部市民公開講座「より早期からの包括的フレイル予防戦略-新概念「オーラルフレイル」から何を狙うのか-」を開催しました。

講演は老年医学、特に、フレイル予防の臨床研究における第一人者であります東京大学高齢社会総合研究機構教授の飯島勝矢先生に行なって頂きました。先生は、平成27年より、安倍内閣の目玉政策である1億総活躍社会の実現のための「1億総活躍国民会議」有識者民間議員をお務めで、一人一人のレベルから地域や自治体地域全体の健康増進に取り組んでおられます。市民講座には、一般市民の方、徳島大学野地学長をはじめ、県内外の大学

関係者、医療関係の方々などを含めて、124名の参加者がございました。講演内容は、高齢化社会における健康長寿の秘訣を学ぶもので、まず人間の老化のプロセスについて、そしてその過程で、全身の筋の衰え（フレイル）や口腔機能の衰え（オーラルフレイル）の段階を通過していくということ、さらにそれを踏まえて、対処すべき方法として栄養、運動、社会参加という三位一体の予防が重要であることをわかりやすい事例や検査法（指輪っかテスト）を示しながら、紹介して頂きました。参加者にとって、健康寿命を再認識させるお話で、大変有意義な市民講座となりました。

なお、本講座は徳島大学歯学部創立40周年と歯学部同窓会蔵歯会創立25周年の記念講演会を兼ねました。



学会情報

■ 日本顎口腔機能学会第58回学術大会

会 長：松香 芳三
開 催 日：平成29年4月15日（土）～16日（日）
会 場：徳島大学藤井節郎記念医科学センター
問 合 先：日本顎口腔機能学会第58回学術大会準備委員会
顎機能咬合再建学分野
松香 芳三
TEL:088-633-7350 FAX:088-633-7391
E-MAIL:okura.kazuo@tokushima-u.ac.jp(担当 大倉一夫)

■ 第49回中国・四国学校保健学会

会 長：奥田 紀久子
開 催 日：平成29年6月18日（日）
会 場：徳島大学藤井節郎記念医科学センター
問 合 先：学校保健学分野
TEL:088-633-9041 FAX:088-633-9012

■ 第255回徳島医学会学術集会(平成29年度夏期)

会 長：苛原 稔
開 催 日：平成29年8月6日（日）
会 場：徳島県医師会館
問 合 先：徳島医学会事務局
TEL:088-633-7104 FAX:088-633-7115

■ 第64回日本栄養改善学会学術総会

会 長：酒井 徹
開 催 日：平成29年9月13日（水）～15日（金）
会 場：アスティとくしま

■ 第17回日本N0学会

会 長：佐田 政隆
開 催 日：平成29年5月19日（金）～20日（土）
会 場：阿波観光ホテル
問 合 先：循環器内科学分野
TEL:088-633-7851 FAX:088-633-7894

■ 第60回中・四国矯正歯科学会大会

会 長：田中 栄二
開 催 日：平成29年7月16日（日）～17日（月）
会 場：あわぎんホール(徳島県郷土文化会館)
問 合 先：口腔顎顔面矯正学分野
TEL:088-633-7357 FAX:088-633-9139

■ 第14回日本循環器看護学会学術集会

会 長：田村 綾子
開 催 日：平成29年9月9日（土）～10日（日）
会 場：あわぎんホール(徳島県郷土文化会館)
問 合 先：療養回復ケア看護学分野
TEL:088-633-9036 FAX:088-633-9036

問 合 先：実践栄養学分野
〒770-8503 徳島県徳島市蔵本町3-18-15
TEL:088-633-7476 FAX:088-633-9427

新任教授ご挨拶



■ 食品機能学分野 教授 河合 慶親

平成28年11月1日付で食品機能学分野教授を拝命いたしました。私は平成15年に名古屋大学大学院生命農学研究科博士課程を修了後、徳島大学医学部助手(食品学講座)に採用されました。平成20年より米国立衛生研究所へ留学する機会もいただきました。平成23年より名古屋大学大学院准教授を経て、平成27年4月より食品機能学分野准教授として再度本学に着任しております。学生時代より、酸化ストレス反応とポリフェノールなど機能性成分の研究を進めてきました。当分野では、化学を基盤として食品とヒトの健康に関する諸問題に取り組んでいける人材の育成を目指して、教育・研究に取り組んでおります。今後ともご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



■ 組織再生制御学分野 教授 山本 朗仁

平成28年11月1日付で、口腔組織学(組織再生制御学)分野を担当させて頂くことになりました。私は昭和63年に長崎大学歯学部を卒業後、同大学院で歯学博士を取得しました。平成4年に同大学第一補綴学講座助手となり、平成7年からカルフォルニア大学ロサンゼルス校で初期発生学と幹細胞学を学びました。平成12年から熊本大学及び神戸理研・発生再生医学研究センターで勤務し、平成20年に名古屋大学大学院医学研究科に移動してから一貫し、口腔組織由来の生体幹細胞が分泌する新規組織再生因子の同定、及び再生因子のみの投与による新しいCell free再生医療の開発を目指して研究しています。今後ともご指導、ご鞭撻を賜ります様よろしくお願い申し上げます。



■ 微生物病原学分野 教授 野間口 雅子

平成28年12月1日付で微生物病原学分野教授を拝命致しました。私は福岡県出身で平成9年に東京農工大学大学院農学研究科を修了しました。企業内研究開発員時代の3年間の米国留学(カンザス大学とジョージタウン大学)を経て、産業医科大学で学位を取得後、ウイルス学研究を究めるため、平成19年に当分野に助手として着任しました。ヒト病原性ウイルスは、その高度な環境適応能により宿主で持続し病原性を発現します。当分野では、ウイルスの生存戦略の解明とこれに基づく複製制御法の確立を目指しております。今後は、医学研究者・医師を志す方々と学問的興奮を共有し、研究・教育に励む所存です。引き続きご指導・ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



■ 脊椎関節機能再建外科学分野 特任教授 長町 顕弘

平成29年3月1日付で脊椎関節機能再建外科学特任教授を拝命いたしました。昭和61年徳島大学医学部医学科を卒業し、整形外科科学講座に入局して早30年が経過いたしました。平成12年に本学で医学博士の学位を取得した後は、多くの時間を臨床現場での医療実践に費やしてまいりました。救急医療、災害医療にも関わってまいりました。超高齢化社会を迎えた日本では、健康寿命の延長が喫緊の課題です。これまで培ってきた臨床経験を生かし、脊椎関節機能再建外科学を発展させ、運動器の老化に伴う機能不全を少しでも改善できるよう努力したいと存じます。皆様のご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



■ 地域消化器・総合内科学分野 特任教授 佐藤康史

平成29年3月1日付で徳島大学 地域消化器・総合内科学 特任教授を担当させていただいております。札幌で生まれ育ちましたので、雪のない冬は快適です。私は平成4年に札幌医科大学を卒業後、消化器内科学、特に消化管内視鏡による診断治療、および消化器癌の化学療法や標的治療ならびに臓器繊維化を制御する核酸製剤の開発等を行って参りました。地域消化器・総合内科学は、高松市民病院の診療支援を中心とした地域医療に貢献するとともに、本学においても臨床に還元できる研究と医学生・若手医師等の教育を行い、優秀な人材育成に寄与することを目標としています。これらの達成に向けて微力ながら全力をつくす所存ですので、ご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い致します。

退職教授等一覧

●医学系	福井 義浩	教授	(機能解剖学分野)	H29.3.31	定年退職
	永廣 信治	教授	(脳神経外科学分野)	H29.3.31	定年退職
	近藤 正	教授	(医用画像情報科学分野)	H29.3.31	定年退職
	齋藤 憲	教授	(生体機能解析学分野)	H29.3.31	定年退職
	谷 憲治	特任教授	(総合診療医学分野)	H29.3.31	任期満了退職
●歯学系	三宅洋一郎	教授	(口腔微生物学分野)	H29.3.31	定年退職
●薬学系	川添 和義	教授	(臨床薬学実務教育学分野)	H29.3.31	退職

学会賞等受賞者紹介

China-Japan-Korea Symposium On Analytical Chemistry, 2016 Poster Prize

■大塚 裕太 [分析科学分野・大学院生]



- 平成28年8月25日
- Investigation on carbamazepine polymorphic transformation kinetics with attenuated total reflectance-infrared spectra and multivariate curve resolution-alternating least squares analysis

日本薬学会第41回製剤・創剤セミナー Postdoctoral Presentation Award

■清水 太郎 [総合薬学研究推進学分野・特任助教]



- 平成28年8月25日
- 脾臓辺縁帯B細胞を標的としたワクチンによる新規がん治療法の開発

第32回若手化学者のための化学道場 最優秀ポスター賞

■中山 慎一郎 [有機合成薬学分野・大学院生]



- 平成28年8月26日
- TAK-1阻害剤LL-Z1640-2の不斉全合成

第32回若手化学者のための化学道場 優秀ポスター賞

■大橋 栄作 [有機合成薬学分野・大学院生]



- 平成28年8月26日
- Palau'amineの第二世代合成研究

第8回日本RNAi研究会/3回日本細胞外小胞学会JSEV 奨励賞

■幾尾 真理子 [創薬生命工学分野・特任助教]



- 平成28年9月2日
- 多発性骨髄腫によるExosomeを介した骨分化抑制機構の発見と解析

第25回DDSカンファランス Postdoctoral Presentation Award 2016

■清水 太郎 [総合薬学研究推進学分野・特任助教]



- 平成28年9月2日
- 脾臓辺縁帯B細胞を標的としたリポソームワクチンの開発

平成28年度消化器癌発生学会研究奨励賞

■岩橋 衆一 [消化器・移植外科学分野・特任助教]



- 平成28年9月15日
- 肝星細胞による肝癌進展増強・薬剤耐性獲得の機序解明に関する研究

日本医療薬学会優秀演題賞

■岡田 直人 [臨床薬学実務教育学分野・助教]



- 平成28年9月18日
- ニボルマブ投与による末梢血リンパ球比率の変化が副作用発現及び治療効果に与える影響

先端歯学スクール2016最優秀賞

■杉本 明日菜 [小児歯科学分野・大学院生]



- 平成28年9月30日
- 間葉系幹細胞の分化運命決定に与関する圧受容体PIEZO1

日本ペプチド学会第53回ペプチド討論会ポスター賞

■森崎 巧也 [機能分子合成薬学分野・大学院生]



- 平成28年10月27日
- Development of N-sulfanylethylamide (SEAlide)-based traceable linker for enrichment and selective labeling of target proteins

第11回日本禁煙科学会優秀演題賞

■岡澤 悠衣 [口腔保健衛生学分野・大学院生]



- 平成28年10月30日
- 喫煙者の口臭と唾液中に検出される口腔細菌の特徴

日本外科学会平成28年度若手外科医のための臨床研究助成授賞

■岩橋 衆一 [消化器・移植外科学分野・特任助教]



- 平成28年11月4日
- 発光ダイオード(LED)の波長強度可変装置による肝細胞保護に関する研究

平成28年度日本薬学会中国四国支部奨励賞

■中尾 允泰 [分子創薬化学分野・助教]



- 平成28年11月5日
- ジゲトピペラジンの分子構造特性を基盤とする機能性分子の創製

第75回日本矯正歯科学会大会優秀発表賞

■天真 寛文 [口腔顎顔面矯正学分野・大学院生]



- 平成28年11月9日
- 新たな下顎臼歯の遠心移動量および移動様式の予測指標の開発-第2報-

第75回日本矯正歯科学会大会優秀発表賞

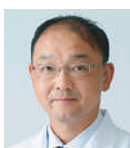
■Islamy R Hutami [口腔顎顔面矯正学分野・大学院生]



- 平成28年11月9日
- The role of osteoclast in the spontaneously developed temporomandibular joint arthritis of the MRL/lpr mice

日本病理学会学術研究賞

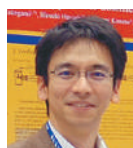
■常山 幸一 [疾患病理学分野・教授]



- 平成28年11月11日
- 異なるメカニズムに起因する新しい肝細胞癌発症モデル動物の創製と病態解析、及び治療法解明への応用

RSNA2016 (Radiological Society of North America) Certificate of Merit・CIRMS Ribbon Award

■林 裕晃 [医用理工学分野・助教]



- 平成28年12月2日
- Universal calibration curve for a small-type OSL dosimeter to be used for direct dose measurements of direct, scattered and penetrating X-rays in the diagnostic region

(公社)日本分析化学会イオンクロマトグラフィー研究懇談会一般ポスター賞

■竹内 政樹 [分析科学分野・准教授]



- 平成28年12月2日
- 徳島市における水溶性酸性ガス及びPM2.5に含まれる陰イオンの高時間分解観測

日本消化器病学会四国支部研修医奨励賞

■川口 智之 [消化器内科学分野・大学院生]



- 平成28年12月10日
- 治療経過中にVasoactive Intestinal Polypeptide(VIP)産生腫瘍に形態転換したと考えられる肝原発神経内分泌腫瘍の一例

有機合成化学協会 塩野義製薬研究企画賞

■猪熊 翼 [総合薬学研究推進学分野・特任助教]



- 平成28年12月12日
- ペプチドへの直接的な不斉マンニッシュ反応を基盤とする新規効率的な分子合成法の開発

第20回日本病態栄養学会年次学術集会若手優秀特別研究賞

■松原 あつみ [疾患治療栄養学分野・大学院生]



- 平成29年1月15日
- 胃癌・肺癌患者の予後予測に有用な栄養評価法の検討

編集後記 本年度から歯学部研究部の新体制がスタートする。巻頭言および冒頭には研究部長および副研究部長の就任のご挨拶をいただいた。医学、歯学、薬学の3分野の関係が非常に近く、堅密に協力して研究教育を推進できることは本研究部の強みである。この強みを活かした研究・教育の成果が国内外に精力的に発信され、これが多数の受賞に繋がると共に、アドバイザー・ボードからも温かい評価と期待が得られたことは大変喜ばしい。第3期中期目標期間においても、より一層の連携強化による更なる教育・研究の発展を期待する。現在の教員は様々な業務に多くの時間を割かれる状況にあるが、研究室学生への直接的な指導が疎かにならないように心掛けたいものである。(難波康祐)